『古事記』学術支援データベースの構築
-システムの概要-¶

生田敦司*, 柴田みゆき*, 齋藤晋*, 杉山正治**, 宮下晴輝*
大谷大学文学部人文情報学科*, 立命館大学理工学部**

1. はじめに

人文科学は史資料に内在する編述者の意図や作為を読み解こうとする．そのための解析作業として史資料情報の索引や検索が行われる．

検出した情報を整理・提示する手法は，表示形式や史資料の付帯情報の量などに左右される．したがって各ユーザーが共通に満足できるシステムを構築することは難しい問題である．

当研究チームはこうした問題を克服する手法を検討し，(1)ユーザーが柔軟に表示項目を決定できる，(2)柔軟かつインタラクティブに表示項目を変更できる，以上を実現するプロトタイプシステムを『古事記』を用いて構想，構築した．

本稿では，これまでに構築したシステムの概要を提示するとともに，人文学者の調査の基礎となるテキスト表示と検索機能に関する考察を行う．

2.『古事記』学術支援データベースの概要

人文科学における文献研究で，古代・上代では『古事記』『日本書紀』をはじめとする諸史料の対比が行われる．

『日本書紀』など紀伝体・編年体の体裁を有する史料は，語彙検索や索引の作成が簡便である．これは検索対象の所在が，年月日などを着地点として容易に設定できるからである．

これに対し『古事記』は和漢混交の文体が漢字で表記され，年月日などの記事指標が存在しない．したがって索引を作成する際には，索引と本文との関係性（着地点の表現方法）が，索引作成者によりまちまちであった（3.1.参照）．このため編年体史料の索引に比べ，『古事記』の索引は普及度が低い．

以上の問題点から，『古事記』の史料情報の中から研究者が必要とするものを調査し，上巻の神話における神・人のデータとその付帯属性を簡便に抽出するデータベースシステムを考案し，そのプロトタイプを提示した[1][2]．

本データベースでは，表題のない『古事記』本文に先行研究を参考にした表題を付した．これにより，着地点を有する検索機能が実現された．これを出発点として，本文表示画面，本文の系譜情報を図像化した系図表示画面，古代伝承と密接に関わる『延喜式』神名帳の情報を提示する画面へと，それぞれリンクすることを企図している．

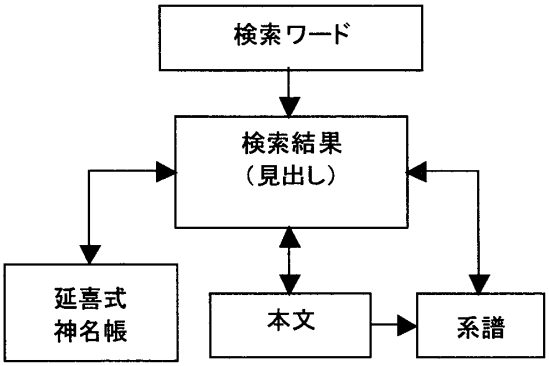

図1 概念図

3. 検索機能と語彙の検討

3.1. 問題点

既存の『古事記』の索引・検索方法には，以下のような類型を挙げることができる．

(a) 漢字一字索引[3]

(b) 索引篇・本文篇の並存[4]

(c) 巻末の索引と本文ページとの対応[5][6][7]

(d) 電子情報・テキストデータ化
（以下「テキスト史料」と称する）

(a)(b)は検索された文字・用語の所在が，特定の資料・版であらかじめ固定され，本文のページ数・行番号などが着地点となる．この場合，その

¶ *KOJIKI* Knowledge Assistant Database System for Academic Usage : Outline of System

*Atsushi Ikuta, Miyuki Shibata, Susumu Saito and Seiki Miyashita: Department of Humane Informatics, Otani University

**Seiji Sugiyama: Faculty of Science and Engineering, Ritsumeikan University

他の普及図書と対応させての検索は極めて困難である.

(c)は(a)(b)に比べて複数の本を必要としないが,検索語彙が限定されている.(d)はアプリケーションソフトでテキスト史料を表示させ,ソフト付属の検索機能を活用して,目的の語彙へは簡便に到達できる.(c)(d)とも,検索した語彙に到達することのみが目的であるから,如何なる文脈の中にその語彙があるのかは,内容に精通した者でない限り即断できない.

前節に掲げた基本機能では,以上の問題点を解決することを主眼に置いたプロトタイプの実装を実現している.

3.2. 検索対象の拡充

史料内容の検討を行うためには,2章の神・人のみの検索では充分ではなく,少なくとも一般名詞全般の情報が得られることが望ましい.

そこで今般新たに,神・人以外の名詞を抽出し,これらを表示させる方法の検討を行った.本稿では便宜上,前節の抽出分類をⅠ類とし,本稿で検討する名詞群をⅡ類と称する.

編年体の『日本書紀』では,吉川弘文館より出版されている索引が広く流布している[8].『古事記』が『日本書紀』と対比される性格上,文献[8]との対比において語彙抽出を行うことが望ましいと考える.まず文献[8]の大分類を次に示す.

人名,官職名,件名,地名,神名・社寺陵墓名

これに習うと本データベースの分類は,

Ⅰ類　人名,神名

Ⅱ類　官職名,件名,地名,寺社陵墓名

となり,Ⅰ類はクリックによって他の付帯属性とリンク可能なものとし,Ⅱ類はクリックを要しない,単なる検索語彙となる.

3.2.1. 神名の問題

記紀では神名そのものが神社名を指している事例がある.例えば「伊勢大神」は「天照大神」を指す場合と,「渡遇宮」や「伊勢神宮」(『日本書紀』)を指す場合とがある.『古事記』には「伊勢大神宮」との表記もある.

本データベースでは,文字列の形質に従って,「神」で語彙の終わるものは全て一旦Ⅰ類に分類し,「宮」「社」と一体となった語彙はⅡ類に分類する.

検索機能では,文字列の検出と所在情報が第一義であって,意味内容の解釈は検索主体が行うべきのもと考える.

3.2.2. 語彙の拡充

本データベースは人文科学全般における有用性を視野に入れている.その意味で,検索語彙は人文科学で注目されうる,出来るだけ多くの語彙を有する必要がある.

『古事記』神話では神の身体の一部から神や物が発生したことを述べる部分がある.これは神話を解釈する上において重要な要素となるが,既存の索引類では,こうした語彙が検索対象として設定されることは極めて少なかった.

本データベースでは,意味内容を有する名詞は出来る限り検索語彙として抽出している.

4. おわりに

以上,『古事記』学術支援データベースについて,概要を提示した上で検索語彙のあり方と表示方法について検討した.

今後は採用されるべき検索語彙の充分な検討を行い,検索語彙が柔軟に補完される手法も同時に考案していく予定である.

参考文献

[1] 生田敦司,齋藤晋,柴田みゆき,"『古事記』学術支援データベースの構築－基本機能の検討－",人文系データベース協議会,人文科学とデータベース,第12回公開シンポジウム-5, pp.47-54, 2006.12.23

[2] 生田敦司,齋藤晋,杉山正治,柴田みゆき,宮下晴輝 "『古事記』学術支援データベースの構築－系譜の図像化とインターフェイスの検討－",人文系データベース協議会,人文科学とデータベース,第13回公開シンポジウム-2, pp.9-16, 2007.12.22

[3] 植松茂『古事記漢字索引』,東京堂出版,1944

[4] 高木市之助・富山民蔵『古事記総索引』,平凡社,1974

[5] 武田祐吉『古事記』,角川書店,1977

[6] 山口佳紀・神野志隆光 校注・訳『古事記』新編日本古典文学全集1,小学館,1997

[7] 三浦佑之 訳・注釈『口語訳古事記(完全版)』,文芸春秋,2002

[8] 六国史索引編集部 編『日本書紀索引』六国史索引一,吉川弘文館,1969